

石川県輪島崎における古民謡 「まだら」の伝承について

瀬 賀 章 代

- I. はじめに
- II. 「まだら」の特徴と分布
 - (1) 「まだら」とは
 - (2) 「まだら」の分布
- III. 輪島崎における「まだら」伝承の状況
 - (1) 輪島崎の概観
 - (2) 「まだら」が唄われる「場」
- IV. 輪島崎における「まだら」伝承の背景・要因
 - (1) 地理的背景
 - (2) 「まだら」披露の機会——祭礼との結びつき
 - (3) 「まだら」習得の機会——連中制の存在
- V. おわりに——今後の「まだら」伝承——

I. はじめに

民謡は古くより、人々の生活と常に密着したものであるとして存在していた。田唄、庭唄、山唄、海唄など、民謡と呼ばれるものは必ず人と共にあった。それらの民謡の中には、草を刈るとか、米をつく、船を漕ぐなどの行動が伴ったり、また春祭りの舞踊とか田植えの儀式、雨乞いのまじない、盆の踊りなどに関連するものも多かった。

柳田国男は「民謡は必ず是を用ゐるべき場合即ち目的があり、しかもそれは総括して作業と名づくべきものであったと思って居る」、また「作業という語をもし人間の社会的行動、即ち人と共にまた人に対

して、為さるるしぐさの一切を意味するものとするならば、民謡にして作業唄にあらざるものは一つもなかったと言ってよろしい」と述べており、民謡と人間の行う作業とが常に深いかわりをもっていたことを明言している。

しかし戦後、機械化の波が押しよせ、高度経済成長の時代を経て現代に至るまでの間に、人々の生活は変質の一途をたどった。それとともに、民謡のあり方も大きく様変わりしてしまった。柳田の述べる「作業」と、民謡が結びつかなくなってきたのである。そしてついには、消失してしまったり、また消失とまではいかなくとも衰退してしまったりという状況が頻繁にみられるようになっている。

このような中で、この現代に至っても、古くから唄いつがれてきた民謡を、今も昔と変わらず人々の生活と密着した存在として守りつづけ、今日に伝承している地域がある。能登半島の先端、石川県輪島市輪島崎はそうした珍しい地域の一つであり、ここでは「まだら」という古民謡が、今日まで唄いつがれてきている。

「まだら」は民謡のなかではかなり古い形態のものであり、日本海沿岸の港町に多く見られる唄である。しかし、今でもしっかり根付いている地域と、もうほとんど消失間近い地域がある。輪島崎は、完全に「まだら」が根付いている地域の一つである。

古くからの「文化」が変質、あるいは衰退へと進む時代の流れの中で、「まだら」という古民謡がどの

ようにしてこれまで輪島崎に根付いてきたのか、またその隆盛を保つことができる背後にはいかなる仕組みがあるのか。その要因を、「文化伝承」と地域社会との関わりを重視して考察するのが、本稿の目的である。

従来の民謡研究は、主として音楽および民俗学の分野で精力的に行われてきた。前者においては服部龍太郎²⁾や浅野建二³⁾に代表されるように、歌詞・曲節の詳細な研究や、日本放送協会が編じた書物⁴⁾のように、全国各地の民謡の採集分類に力を入れたものが多い。一方、後者においては主役は人であり、人がいかに民謡を伝承したかという点を考察した柳田国男⁵⁾、いかなる手段で他地域へ伝播させたかを論じた竹内勉⁶⁾の研究などが挙げられる。

これらに対して、地理学の分野で「民謡」はなじみが薄く、従来とり扱われることはほとんどなかった。そうした中で、松尾容孝は、歌謡田植の衰退過程を稲作生産技術の変化と関連させた興味深い報告を行なっているし⁷⁾、湯山健一は民謡を人文主義地理学の視角から考察することにより、人間と風土の関わりを明らかにしようと試みている⁸⁾。これらの研究は、民謡を地域社会との関連で考察すれば、極めて地理学的な研究になることを教えてくれる。本稿はその点をさらに強調して書かれたものである。

II. 「まだら」の特徴と分布

(1) 「まだら」とは

九州佐賀県の唐津と杵岐にはさまれた杵岐水道に、^{まだら}馬渡島がある。「まだら」とは、この小さな島が発生の地とされる古民謡である。「まだら」はもともと船乗り唄であり、海唄であったが、起舟⁹⁾・造船式のみならず、現在では結婚式・「建ちまい（建前）」の際にも唄われ、祝儀唄としての性格がかなり強くなっている。

「まだら」は海上のルートによって九州から日本海沿岸を北上したと推測され、やや曲節（節まわし）が変化しているものの、明らかに「まだら」と思わ

れる唄が、主に日本海側の各地に散在している。これらの唄を総称して、系統的に「まだら」と呼んでいる。

「まだら」は、「めでためでたの若松様よ 枝もさかえる葉も茂る」を元唄とする。産み字¹⁰⁾をたくさん持ち、^{じょうじょう}嬌 嬌とした長い節まわしが特徴であり、書けばわずかこれだけの文句を延々と唄いつなぐ。この長い節まわしが、「まだら」であるかどうかを判定する際の大きな指標となっている。あまりに長い節まわしのため、田んぼで農作業していた農民が「まだら」を唄いはじめ、牛をひいて我が家に帰り、再び田んぼへ戻り、二度目に我が家へ帰着したら、ようやく唄い終わったというエピソードもあるほどである。

本稿でとり上げる輪島崎の「まだら」は、正確には「輪島崎まだら・あおり」と呼ばれている。「輪島崎まだら・あおり」は、「祝い目出度い おもことかのた 末は鶴亀 五葉の松」¹¹⁾という「輪島まだら」のあとに、さらに「あおり（安乗）」を付ける。その点で他の「まだら」と異なる。

「あおり」は「まだら」と曲節を同じくするが、しかし、唄われる場によって文句が違う。「あおり」の歌詞には5種類ある。例えば結婚式の場合には、「輪島まだら」に続いて「ここの座敷は 目出度い座敷、鶴と亀とが 舞い遊ぶ」という「あおり」が付き、起舟の際には「新造目出度や八帆巻き上げて おもた港へ そよそよと」という「あおり」が付く¹²⁾。唄われる場に応じた「あおり」を付けるのが、「輪島崎まだら・あおり」の特色である。

「あおり」も「まだら」と同じく節を長く引っ張り、書けばわずかな文句を、延々と唄いつなぐ。「輪島崎まだら・あおり」を唄うのに要する時間は7分余りである。「輪島まだら」の部分も「あおり」の部分も、最初の一節は「音頭」の者一人で、あとの「付き」は残りの者全員で唄う。

(2) 「まだら」の分布

輪島崎以外にどこに「まだら」が伝わっているのか、ここで「まだら」の分布状況を把握しておきたい。その際、何を指標として土着の民謡を「まだら」であると判定するかが問題となる。

「まだら」の代表的な元唄である「めでためてたの若松様よ 枝も栄える葉も茂る」は極めてありふれた歌詞であり、「まだら」に限らずあらゆる類の民謡にみることができる。したがって、歌詞のみで「まだら」であると判定することには危険性がつきまとう。となると、決め手は曲節ということになる。幸い「まだら」は曲節に大きな特徴を持つ。すなわち、産み字を長々と引いて斉唱あい和する点である。

この点を主たる指標として、全国の「まだら」を文献資料¹³⁾から集める作業を行なった。そこに『「まだら」系統の唄』と分類されているもの、「まだら」という題をもつ唄は「まだら」に含めた。それを分布図に示すと、図1のようになる。

「まだら」は、九州から秋田県に至る、おもに日本海側の港町に広く分布しており、ところによって

は内陸にも入っている。これを見たかぎりでは、「まだら」は日本海の海上交通を中心に伝播したのではないかと考えられる。なぜなら、本州日本海側における「まだら」の分布地点と、北前船の主な寄港地がほぼ一致するからである¹⁴⁾。

事実、北前船によって運ばれたとされる民謡がいくつか報告されている¹⁵⁾。例えば、追分節は日本海の各地にひろがっているが、これはもともと浅間山麓の馬子唄であった追分節が越後に伝わって越後追分となり、海上を伝播して北海道にまで渡り、江差追分や松前追分になったものだという。また出雲の出雲節も、能登半島以北では船方節という名で、北海道の江差まで及んでいる。これらは北前船が日本海各地へと伝播させた唄の好例であり、「まだら」もこの一例と考えてよからう。

III. 輪島崎における「まだら」伝承の状況

(1) 輪島崎の概観

本研究の対象地、輪島崎は、石川県輪島市の半島



図1 「まだら」の分布

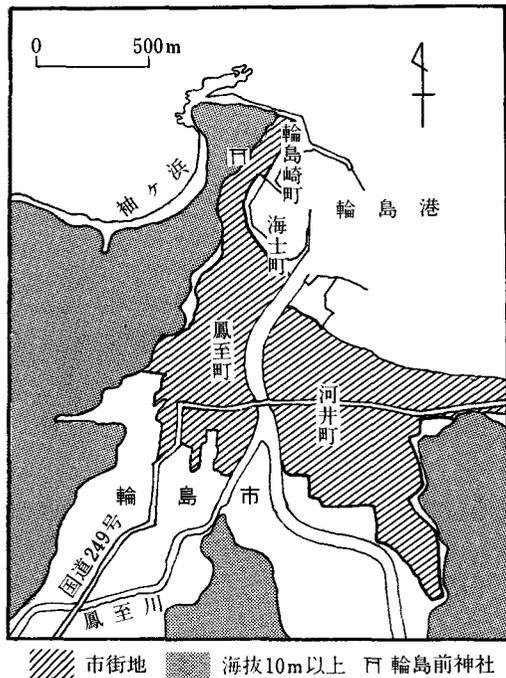


図2 輪島崎付近概観図

部最北端に位置する漁業の町である(図2)。1991年現在、世帯数210、人口1,000人弱で、就業者の約9割が漁業に関係している。夫が船に乗り、妻が朝市に出るとというのが家族形態の典型である¹⁶⁾。

輪島崎の過去を少々遡ると、近世においては当地は、北前船の重要な寄港地であった。表1は寛文10(1670)年の「村御印」¹⁷⁾から、輪島崎とその周辺諸村(現輪島市域内)の外海船權役(船首にかかる小物成)と間役(船付場に入出入りする船にかかる口銭)の上納銀高を抽出したものである¹⁸⁾。

この表によると、外海船權役の大きい輪島村は所有している船数が多く、海運・漁業の根拠地であったことが分かる。一方、間役の大きい輪島崎村は、出入りする船数が多かった、すなわち海運の寄港地だったことが分かる。「まだら」のような外からの文化の流入という点では、前者の大小よりも後者のそれが大きな意義をもっているものと考えられ、その意味で輪島崎は、この地域で最大の外来文化の受け入れ地であったということができよう。

表1 寛文10(1670)年の村御印に見える海運関係上納銀高
(単位:匁)

村名	外海船權役		退 転	間 役		退 転
	出来			出来		
鶉 入	21.0	21.0		112.0		52.6
光 浦	14.0	14.0				
時 国	87.5	31.5				
川 西	35.0		63.0			
名 船	98.0		147.0			
尊 利 地	126.0	28.0				
小 田 屋	119.0	35.0				
大 沢	84.0	84.0		32.4	16.4	
輪 島	1473.5	906.5				
輪 島 崎	56.0		7.0	3992.2		284.6

注1) 出来は明暦2(1656)年の黒印状より増加した分

2) 退転は明暦2(1656)年の黒印状より減少した分

(『輪島市史』1976, 370~372頁参照)

(2) 「まだら」が唄われる「場」

民謡に限らず、広い意味でのいわゆる歌にとって、それが唄われる「場」が存在するというのが、後世への伝承に極めて重大な意味をもつであろうことは論をまたない¹⁹⁾。「まだら」がおそらくは北前船の寄港とともに輪島崎に上陸したことは上述のとおりであるが、ここでは上陸後、輪島崎において、いかなる場で「まだら」が唄われ伝えられてきたかを概観してみたい。

「まだら」が唄われる場として、過去においては船宿、現在まで続いている場としては、輪島前神社の祭礼の場、結婚式、起舟、「建ちまい」、漁師仲間「連中」の寄進披露宴²⁰⁾などが挙げられる。

まず近世においては、安政5（1858）年の『輪島町書上帳』²¹⁾から、船宿が重要な「まだら」伝承の場であったことが推測される。それによると、輪島崎には北前船時代、四郎右衛門・四郎兵衛・与次郎・仁兵衛・藤兵衛・与三兵衛・孫左衛門の7軒の船宿があり、それらを中心に輪島崎は開けたとある。その面影は現在では皆無に等しいが、現在でも、それらの船宿のあった土地を「トイヤシ」と俗称している。これは北前船時代の「問屋衆」（船宿を兼ねた船問屋衆）の訛った呼びかたで、当時そこにあった7軒の船宿の敬称が、地名の俗称に変化して伝えられているものと理解される。

当時の船問屋は、他地域からやってきた商人や船乗りが集い、様々な文化の交流の場となっていた。彼らの間で唄われる船乗り唄・漁師唄は、仕事の後仲間と一杯やると、自然に漁師間で口ずさまれ、そこに居合わせた他地域の人々に広まる可能性は十分あったのである。

次に、「まだら」が唄われている現在の場をみてみよう。

輪島崎は、昔ながらの年中行事がよく残されている地区である。輪島崎の守護宮である輪島前神社には年間24の祭礼があるが(表2)、それらの祭礼は現在でもほとんど廃れることなく、地区全体で一つ残

表2 輪島前神社年間祭礼表

祭 礼 名	月/日	
元旦祭	1 / 1	
二日祭	1 / 2	
三日祭	1 / 3	
お神楽祭	1 / 6	
七草祭	1 / 7	
除厄祭	男厄祓 女厄祓	1 / 7 1 / 7
春期恵比須講*	出社祭 合同祭	1 / 10 1 / 10
起舟祭*		1 / 11
面様年頭	おいで面様	1 / 14
小正月祭		1 / 15
お日待ち講*	宵 祭 朝 祭	1 / 15 1 / 16
面様年頭	お帰り面様	1 / 20
天神講*	宵 祭 朝 祭	1 / 24 1 / 25
鎮火祭		2 / 6
船玉講*	宵 祭 朝 祭	2 / 19 2 / 20
春 祭	宵 祭 朝 祭	4 / 2 4 / 3
節句祭		6 / 5
八坂鎮疫祭		6 / 20
市 祭	宵 祭 出社祭	6 / 19 6 / 20
例大祭	キリコ清祓 神社献幣祭 出社祭 お仮屋朝祭 出興祭	8 / 25 8 / 25 8 / 25 8 / 26 8 / 26
金比羅・弁天祭		8 / 26
秋 祭	宵 祭 本 祭	10 / 8 10 / 9
七五三詣祭		11 / 15
秋期恵比須講*	出社祭 合同祭	11 / 20 11 / 20

上記以外に月次祭が毎月1・25日に行われる

*は「まだら」が唄われる祭礼

らずとり行われている。「まだら」が祭礼の中でどのように唄われているのか、祭礼の一つである恵比須講を具体的事例として、次に詳しくみてみよう。

恵比須講は、毎年1月10日と11月20日の年2回行われる²²⁾。それに先立つ1月6日、お神楽始めの祭典の直後に、神前で「おみくじ」²³⁾が引かれ、その年の恵比須講の当番15名が決定する。一度当番に当たると「おみくじ」から除外していくので、最終的には全戸必ず当たることになる。

祭礼日当日は、午前9時に当番全員が袴²⁴⁾に正装し、恵比須神社（輪島前神社の小宮）に集合して御祓いを受け、出御祭がとり行われる。この恵比須神社の奥殿には陶器製の恵比須像と木製の恵比須像が安置されている。前者を「若恵比須」、後者を「年寄り恵比須」と呼び、恵比須講ではこの「年寄り恵比須」が持ち出される。恵比須講とは、座高70センチ余りの木製恵比須神像の神幸祭なのである。恵比須神像は重いので、当番が所役を交替しながら、輪島崎210世帯の全戸を巡回する。ただし、不浄の家²⁵⁾は回らない。回る際には一定の順序があり、春季と秋季のそれでは逆回りとなる²⁶⁾。町内を一巡して帰ってくると、12時近くになっている。

午後1時から、場所を広い本社（輪島前神社）の中に移し、正面に年寄り恵比須と若恵比須を安置して、再び恵比須祭がとり行われる。このときには全世帯から一人ずつ、すなわち200人近い人々が参集するので、拝殿内は超満員となる。当番は全員袴を着用、他の氏子一般は平服である。祭典が済むと、その場で銘々向かい合わせに座り直して直会²⁷⁾が始まる。この時の直会の料理は当番の女将たちの手作り料理であり、言うならば当番15名が春秋2回、氏子全員を食事に招待することになるわけである。直会は村人どうしの交流の場であり、憩いの場でもある。

直会が始まって約30分、頃合をみて一人の村人が「輪島崎まだら・あおり」を唄い出し、音頭をとる。これは、あらかじめ当番の者が上手な人に頼んでおく。それゆえ、どの「あおり」を付けるかは、頼ま

れた村人に任せられる。残りの村人は、音頭に合わせて付きの部分唄う。村人200人余りでの大合唱となる。それまでは酔いしれて足をくずしていた村人も、「まだら」が始まると分かると、即座に正座し直す。したがって、「まだら」は全員正座で厳かな雰囲気の中で唄われる。

「まだら」を唄い終わると恵比須講はお開きとなり、それ以後は各自自由にしてよい。そのまま飲んでいる者もいれば、帰っていく者もいる。特に終わりの挨拶など何もないが、「まだら」を唄うことそれ自体が、村人たちにとってはその場に居合わせた人たちへの終わりの挨拶なのである。こうして、「輪島崎まだら・あおり」を盛大に唄い終わることによって、ごく自然な形で恵比須講は終了となる。

結婚式では、媒酌人の挨拶が済み、主賓の祝詞が終わり、乾杯して、場が少し雑然としたとき、場を締めるために「まだら」が唄われる。このときの「まだら」は、その役割から「落ち着きまだら」と呼ばれる。「『まだら』を唄って、酔った気分を少し落ち着かせましょう」というものである。また、式の最後にもう一回「まだら」が唄われることもある。これは「しまいまだら」と呼ばれ、その祝宴が終わったことを意味する。ただ、現在では「落ち着きまだら」と「しまいまだら」の両方が唄われることは稀で、最初の「落ち着きまだら」だけを唄うのが常となっている。これは結婚式に限らず他の宴会の場合にも言えることである。

漁師にとって最も大切な行事の一つである起舟の場合には、朝から一連の儀式が続く。午前4時、男たちが袴を身にまとい、輪島前神社へ参拝する。この時御初穂²⁸⁾を持参し御祓いを受けたのち、御神酒と「ゴクサマ」といわれるお米を茶さじでいただく。その後すぐに自分の持ち船へ行き、御神酒と餅を供えおまいりする。夕方、起舟祝いと称して、近くの料亭で船主が乗組員を招待し、宴会が催される。この席でも、恵比須講の場合と同様に、あらかじめ音頭取りを一人決めておいて、頃合を見計らって「ま

だら」が唄い始められる。唄い終われば自然にその場は解散となる。

またこの他、連中仲間（詳細はIV章）で輪島前神社へ寄進する際、その披露宴の席で、「まだら」はひととき盛大に唄われていた。

輪島崎では「まだら」を他の仲間と共に唄うことは、何らかの意味を持っているのが常である。それは、時と場合によって終わりの挨拶であったり、少し酔いを覚ましましょう、という類のものだったりする。「まだら」を唄うことが、結果的には、ある場面から次の場面への移行がとどこおりなく行われることにつながっている。

このことは「まだら」に限らず、民謡全般についてもいえることである。一部の地域を除いて現代はともかく、少なくとも昔は、民謡は人と人との会話であり、社交の一儀礼であった²⁹⁾。人々が一つの座敷に集まる、集まれば必ず唄のやりとりが始まり、興のれば手が鳴り、踊りも始まる。一人きりでは容易に唄は興らなかった。人々の寄り合う座敷が、民謡伝承の有力な「場」となっていたのである。

以上、輪島崎においては「まだら」が、結婚式や「建ちまい」などのめでたい席のみでなく祭礼とも結びつき、現在に至っても村人たちと密着した存在であることを、恵比須講を事例として述べてきた。しかしII章(2)でみてきたように、「まだら」が分布する地域は複数あるものの、輪島崎のように現在でもほとんど衰退することなく、今に受け継がれてきている地域は、極めて稀である。多くの地域では、保存会等の活躍により、文化祭・芸能祭など特設の場でのみ、かろうじてその面影を留めているのが現状である。実際、北前船時代より現在に至るまで、途絶えることなくこの古民謡を伝承していくことは、一般的にはかなり難しい。

こうした中で、なぜ輪島崎においては「まだら」がかくも変わらず存在し得たのだろうか。そのスムーズな伝承の背景には何があるのだろうか。次にいくつかの要因を挙げながら考察してみたい。

IV. 輪島崎における「まだら」伝承の背景・要因

(1) 地理的背景

能登半島は本州の日本海岸の中央に位置し、三方を海に囲まれ、極めて海洋性に富んだ地域である。このような地理的位置ゆえに、古来より現代に至るまでの間に、能登半島と日本海沿岸地域が交渉をもった時代があったことは周知の通りである。

天平時代、日本と渤海国が友好的な関係にあったとき、能登は渤海使節の発着の地とされた。また、江戸中期から明治の初めにかけての北前船時代には、能登は、寄港地、避難港、風待港としての適性を備え、諸船の出入りも活発であった。海への門戸の開放は、能登に多大な経済的潤いをもたらすと同時に、他からの様々な文化の流入を促す結果となった。「まだら」もその一例であるといえる。しかし、能登半島の入口としての口能登は、南を石動山、宝達山などの宝達丘陵によってふさがれている。つまり能登半島は、一方で海洋性に富んでいるが、他方において、陸上からは半孤立の地域であった。

能登半島の「海への開放・陸からの孤立」という地理的特性について、文化の流入という観点から考えるとすれば、能登半島は概して「海からの文化が流入しやすく、陸からの文化は流入しにくい」といえよう。もちろん海から新たな文化が次々と流入すれば状況は違ってくるが、能登半島が、国際的あるいは全国的な規模で文化流入の機会に恵まれるのは、歴史上の少ない時期に限られており、しかもその機会は断続的であった。つまり能登半島においては、絶えず文化の流入の機会にさらされていたのではなく、文化流入の時代を経たのちは、冷却期間すなわち比較的文化流入の少ない時代へ入り、流入した文化が新しい文化にとって代わられる前に、地域に根付くことが可能であったのではないか。

実際、能登半島には前代の文化をよく伝承する地域が少なくない。内浦のあまめはぎ³⁰⁾、柳田村のアエ

ノコト³¹⁾、門前町のぞんべら祭り³²⁾、輪島崎の面様年頭³³⁾等々、国の重要無形文化財に指定されている古くからの民俗が数多く現存しており、能登半島は「文化のふきだまり」であるとしばしば称される。「まだら」も、北前船あるいはなんらかの海運によって輪島崎に伝えられ、そしてそれ以後は先に述べた地理的条件、あるいは歴史的条件により、外からの新たな文化にとって代わられることなく、現在にまで伝承されてきたのではなからうか。輪島崎におけるスムーズな「まだら」の伝承を可能にした背景には、このような地理的条件があると考えられる。

(2) 「まだら」披露の機会——祭礼との結びつき
「まだら」は結婚式、「建ちまい」、新造祝い³⁴⁾等のいわゆるおめでたい席、それに加えて、漁師にとって最も大切な儀式とされる起舟祭にも唄われる。これは、輪島崎だけでなく全国的にいえることであり、一般的な「まだら」の唄われる「場」である。

その中で、輪島崎に特徴的なのは、「輪島崎まだら・あのり」が輪島前神社の祭礼、なかでも「お講神事」と深く結びついていることである。件数にして年間24ある輪島前神社の祭礼のうち、儀式の一環として「まだら」が唄われるのは、春季恵比須講、秋季恵比須講、起舟祭、お日待ち講、天神講、そして船玉講（漁業祭ともいう）であり（表2）、起舟祭は別として、他はすべて「お講神事」である。ここで着眼したいのは、このような公の場において、「まだら」が頻繁に唄われているという事実である。すなわち「お講神事」という「場」を通して、「まだら」が公に披露される機会が年に6回もあるのである。

さらに「お講神事」においては、儀式が済んだ後の講番だけの直会でも、必ず「まだら」が唄われる。この直会は非公式の宴会であり気の張らぬものであるが、「まだら」を唄うことは慣習的となっており、半ば義務的なことでもある。それゆえ輪島崎では、「『まだら』の一つも唄えんようじゃあ、半人前だ」と見なされる。数多くの祭礼が現在も存続している

輪島崎において、「男一人前」として生きていくためには、他の村人と同様に祭礼をこなしていくことが当然なのであり、これらの祭礼と結びつく「まだら」を唄えるようになることも、その必要条件なのである。

以上のように、「まだら」は祭礼、特に「お講神事」と結びつくことにより、公に唄われる「場」を確保し、自身の後世へのスムーズな伝承を可能にする一つの要因を持ち得た。民謡に限らず、広い意味での唄にとって、それが公に唄われる「場」すなわち「機会」が存在することは、後世への伝承に極めて有効であろう。しかしながら、「まだら」が伝承されるには、披露の機会とは別に、それを習得する機会も必要である。次節では、その役割を担った「連中制」という社会制度について述べていきたい。

(3) 「まだら」習得の機会——連中制の存在

輪島崎には古くより、連中制と呼ばれる漁師仲間制度が存在していた。これは、村の生活の必要性からいわば自然発生的に成立をみたものらしく、時代による変化をとげつつ存続してきた制度であり、輪島崎においては重要な社会制度であった。この制度は昭和33(1958)年廃止に至ったのだが、「まだら」の伝承を語る上では欠かすことができない。よって以下、連中制が「まだら」伝承にどのように関わってきたか検討していくこととする。

輪島崎では、15～16歳になり義務教育を終えると、同年齢の男子で「連中」と呼ばれる集団を組織した。これは、漁業を生業とする輪島崎においては、端的に言えば、漁師仲間結成の制度である。連中では「親方」（リーダー）が定められ、親方の家の屋号をとって、例えば「政五郎連中」と称し、その家の二階を「連中場」と定める。

連中の果たすべき役割はいくつかある。まず、輪島崎の将来を背負って立つであろう若者を、一人前の漁師に育てることである。網の作り方、針のつけ方、糸の結び方など漁具の作り方から、船のこと、

漁のことなど、漁師に必要な知識や技能はみな連中で学んだ。

その他、村祭りの執行では中核的役割を担当すること、村の平穏な生活秩序を維持し緊急事態の発生には率先して出役すること、および村内の婚姻の成立・承認には独自の交渉を展開すること等々も連中の機能となっている。これらの点に関しては、全国の若者組・若衆組などと呼ばれた類似の組織とほぼ共通する一面が認められる³⁵⁾。ただ、輪島崎の連中の場合、守護宮である輪島前神社への寄進も非常に重要な役割であった。実は、この輪島前神社への寄進を通して、連中制は「まだら」伝承に大きく関与することとなるのである。

輪島崎の男子は15～16歳で連中に加わるが、その後数年がかりで魚を売った金等を貯え、19～20歳頃、連中単位で輪島前神社へ寄進するのがしきたりとなっていた。この寄進を終えることが、輪島崎で言う「男一人前」への関門であり、先輩漁師たちの仲間入りとなる重要な伝統的慣習だったのである³⁶⁾。そして、この寄進の披露宴の席で、寄進した連中全員で「輪島崎まだら・あおり」を唄うのが、古くからの習わしであり、なかば義務的なこととされた。まちがっても「まだら」を唄わないことがあれば、それはその連中全体の面目失墜を意味した。一人前の漁師になるためには、「まだら」の習得も必須条件だったのである。

それゆえ、声自慢の古老を先生役に、寄進前には連中全員で「輪島崎まだら・あおり」を懸命に覚えた。冬はこたつで、また夏は防波堤の端でけいこをつけてもらい、網待ちの船上でそっと反復してみたという。連中の仲間と一緒に、しかも先生をつけてまで覚えるのであるから、個人的に覚えるよりもかなり能率はよかったといえる。もし誰も教えてくれない場合、たとえ一人でも、やはり自発的に「まだら」を覚えなくてはならなかった。私の出会ったインフォーマント（65歳）によると、「まだら」を習得することに、何か使命感のようなものを感じていた

という。

連中の行う寄進が、連中単位での「まだら」披露の機会を提供する。そのために、連中単位で「まだら」習得に力を注ぐので、覚えるのもたやすく、また全員が唄えるようになる。そして「まだら」の披露が終わった寄進後には、その連中は一人前と見なされる。このように、連中制は、寄進を通じて「まだら」習得の場を提供しており、「まだら」の伝承を支える大きな力となっていた。連中制は「まだら」伝承に極めて有効に機能していたのである。

V. おわりに——今後の「まだら」伝承——

以上、「まだら」という古民謡の伝承が輪島崎においていかなる状況にあるのか、またそのスムーズな伝承の背景に何があるのかに主な焦点を当て論を進めてきた。要旨を簡潔に述べるとすれば次のようになる。

輪島崎の「海への開放、陸からの孤立」という地理的位置は、北前船時代より現代に至るまで、「まだら」存続の可能性を多分に提供してきた。「まだら」はおめでたい席で唄われる以外に、輪島前神社の祭礼、特に「お講神事」と結びつくことにより、公で唄われる「場」を確保した。すなわち、「まだら」披露の公的な機会を数多く持ったことが、「まだら」を伝承させる大きな要因となった。一方、輪島崎においては、輪島前神社への寄進を介し、連中の成員全員が「まだら」を唄えるように、連中制が「まだら」習得の機会としてうまく機能していた。

以上のように輪島崎においては、「まだら」の伝承には極めて有効な条件や背景がうまく機能して、「まだら」は他地域には類をみないほど極めてスムーズに伝承されてきたといえる。

ところで、輪島崎において「まだら」が伝承されているのは、男性ばかりではない。女性にも確実に「まだら」は受けつがれている。女性は、輪島前神社の祭礼にこそ参列しないものの、結婚式、「建ちまい」、新造祝い等々、おめでたい行事では確実に「ま

だら」を唄っている。これら祝宴の席では、『まだら』をすまさんことには先いけん」という風潮があり、「まだら」を唄い終えないと次の余興には入れない。親戚一同が会する席で「まだら」を唄うことは、女性にとってもまた必須条件なのである。

最後に、輪島崎における「まだら」伝承の将来にふれて結びとしたい。

昭和33(1958)年、「まだら」伝承を支えてきた連中制が廃止された。連中内では団結心が強く、一人が第三者とケンカするとメンバー全員がケンカに加わるような風潮も見られ、このことが発端となって廃止に至ったという。これにより連中場もなくなり、漁師としてまた人間として、一人前に生きていくためのノウハウを教えてくれた親方もいなくなった。同時に寄進の披露宴のために「まだら」を正式に習うという風習もなくなった。

連中に代わるものとして、中学卒業後の同級生たちが、「～連」「～会」と称するグループを作るようになった。しかし、このグループには連中場もなく親方もいない。また「まだら」を正式に習うこともない。ただ月に一回頼母子講を催し、また新年会やグループでの旅行を楽しむだけである。かつての連中のように、まさに生活と密着したものではないが、そのためかえて気楽なグループであるともいう。

もっとも、「まだら」を習う機会がなくなったといっても、現在輪島崎の祭礼をとりしきっているのは、連中に所属していた世代の人たちばかりであるから、祭礼の中で唄いつがれている「まだら」には、衰退の気配などみじんもないように感じられる。実際、「まだら」は、年輩の方ももちろん、若者もことあるときには必ず唄っており、輪島崎においては誰でも「まだら」を唄えるのが当然と見なされる風潮は、現在も確かにある。しかし今の若者には、連中の一員として正式に「まだら」を習う機会が失われたため、年輩者たちが常日頃唄うのを聞いて、いつの間にか「まだら」を唄えるようになったというのが実状のようである。そのためか、「付き」はできるが「音

頭」はとれない者が多くなってきているという。

昭和32(1957)年に「輪島崎まだら・あおり」が輪島市指定文化財になったのを受けて、翌33年「輪島崎まだら・あおり」保存会が結成された。これにより、連中制廃止以後も「まだら」を正式に習う「場」は確保されたが、連中制のように輪島前神社への寄進を介して、何が何でも覚えなくてはならないという義務感・切迫感に欠けるため、連中制ほどの効果はあがっていない。

若者が「まだら」をなかば義務的に習う機会に恵まれなくなったことが、今後の「まだら」の伝承にマイナスとなることは想像に難くない。現在は前述のように「まだら」は隆盛を保っているが、今後、輪島崎においても「まだら」が衰退する可能性はないのである。北前船時代より現代に至るまで、輪島崎においてずっと唄いつがれてきた「まだら」が今後もスムーズに伝承されていくかどうかは、次代を担う若者たちにかかっているといえよう。

(富山県井波小学校)

〔注〕

- 1) 柳田国男(1990):民間伝承論(『柳田国男全集 28』ちくま文庫,筑摩書房),431~440頁。
- 2) 服部龍太郎(1976):民謡の音楽的構造(『日本民謡全集(総論編)』雄山閣),64~90頁。
- 3) 浅野建二(1976):民謡の詞型,前掲2),42~61頁。
- 4) 日本放送協会編(1977):『日本民謡大観(九州篇)』日本放送出版協会などの『日本民謡大観』シリーズ。
- 5) 前掲1),431~440頁。
- 6) 竹内 勉(1976):民謡の流転と交流,前掲2),10~39頁。
- 7) 松尾容孝(1981):広島県山間部農村における歌謡田植の衰退過程,人文地理,33-4,64~74頁。
- 8) 瀧山健一(1991):民謡研究の方法—人文主義地理学的方法のアプローチの可能性—,『1991年度人文地理学会大会研究発表要旨』,72~73頁でその概要が発表された。

出し、また秋のそれは「おかえり恵比須」といって、恵比須様への感謝の意味をこめて海から陸へお迎えする。

- 23) 「おみくじ」には氏子の氏名が記されている。選出の方法は、まず「おみくじ」を三宝にのせて神前に供え、ご祈禱し、次に神主が先に釣針がついた幣で「おみくじ」をなでる。くっついてあがった「おみくじ」に記された家その年の当番となり、15名が選出される。
- 24) 同じ地質・文様・色目からなる肩衣と袴の略称。江戸時代に武士が着用した。輪島崎の成年男子は全員もっており、事あるときは必ず着用する。
- 25) 当年あるいは前年、人が亡くなった家。
- 26) 春季は漁業の開始を意味する祭礼なので町内の南から北の方角へ、即ち、山の方から海の方へと向かって廻り、秋季は漁期の終了を意味し、すなわち、海から山の方へ廻る。
- 27) 神事後、神前にささげた御神酒・神せんをおろして行う宴会のこと。
- 28) 神社へ参拝する際、持参するお金のこと。お金を入れた封筒の表側には、自分の名前をしるしておく。
- 29) 三隅治雄が多数の事例を報告している。たとえば、鹿児島県の奄美諸島の村々では、正月の生年祝い・新築祝い・結婚の祝いなどを人間生涯の大事の祭りとして厳重に行い、その客席に血縁・地縁の者を大勢招いて歌舞の交歓を盛大に行うという。三隅治雄（1976）：民謡と芸能、前掲2）、234頁。
- 30) 秋田の「なまはげ」に似た行事で、地区の大人が鬼にふんして「なまげ者はおらんかー」と家々を廻る。「あまめ」は、こたつや炉端から動けぬなまげ者の足にできるマメのこと。節分の夜行われる。
- 31) 12月5日と2月9日の年2回行われる。12月5日のそれは、春から収穫期まで農作業を見守って

くれた田の神の夫婦を自宅に招いて感謝する。また2月9日には12月9日に迎えられた神様を、今度は田へお送りし、豊作を祈願する素朴な祭りである。

- 32) 古式にのっとり田の植え付けを模した祭礼で、600年の古い歴史を持つ珍しい行事。2月6日に行われる。
- 33) 狩衣姿に「くしがき」と「女郎」と呼ばれる奇面をつけて、神様にふんした子供2人が、夫婦神様気分でご戸を廻り、「おめでとうございます」と年賀のあいさつをうける。なお、この神様は一言も口をきかない。1月14日と20日の両日行われる。
- 34) 造船式のこと。
- 35) 天野武（1978）：『若者組の研究』柏書房、560頁。
- 36) この寄進を境として、先輩漁師たちの自分たちへの扱いも、少しずつ一人前と見なした処遇に変わってくるという。同時に、寄進を終え一人前の漁師となることは、漁師としての報酬の如何に直結していた。船の乗組員としての報酬は、寄進前は船全体の儲けの18～20%しか取り分がなかったのが、寄進後は儲けの23～25%が自分の取り分となる。これは他の先輩乗組員たちとほぼ同等の報酬であり、これによって名実ともに先輩漁師たちと肩を並べたこととなる。

[付記]

本稿の作成にあたり、溝口常俊先生をはじめとする富山大学地理学研究室の諸先生方に御教示を賜りました。大学院の先輩諸氏や歴史地理学会編集委員会からも適切な御指導を頂きました。また、現地調査・資料収集にあたって、輪島崎では加治作治氏、中村裕氏、北村陽子氏、馬渡島では柴田元子氏ら多くの方々にお世話になりました。記して厚くお礼申し上げます。

THE INHERITANCE OF AN OLD FOLK SONG *MADARA* IN A FISHING COMMUNITY :
A CASE STUDY OF WAJIMASAKI, ISHIKAWA PREFECTURE

Akiyo SEGA

Traditional folk songs have rapidly disappeared in Japan since the 1960s, the period of high economic growth. However, some old folk songs have survived till now, one of which is *madara* sung popularly in Wajimasaki, a fishing community facing the Japan Sea.

Originally *madara* was maybe a song of fishermen in the Madara Island situated off the northern coast of Kyushu. It was supposedly spread to seaports along the Japan Sea mainly by commercial ships navigating it between Hokkaido and Osaka during the Tokugawa period. *Madara* took root also in Wajimasaki which had played an important role as a large seaport of call on the shipping route in those days.

The purpose of this paper is to examine how and why *madara* has been inherited better in Wajimasaki, particularly by focusing on its relation to the regional community. The findings obtained by interviews and observation are as follows :

1. Comparatively isolated location of the Noto Peninsula including Wajimasaki helps old cultures like *madara* to survive for generations.

2. Wajimasaki has had many opportunities to sing *madara* together. It is important that it is sung six times a year publicly in divine services of the community shrine, as well as on private affairs such as wedding ceremonies, launching ceremonies, and topping-out ceremonies.

3. Wajimasaki had an opportunity for the youth to learn *madara*. Every boy who became 15 years old must join the *renchu*, a youth group composed of the boys of the same age. Apart from acquiring the fishing skills, he was taught *madara* so that he could sing it in the donation ceremony to the community shrine by the *renchu* group. He had to learn it by all means, because without finishing the donation he was not considered independent.

Unfortunately the system of *renchu* was abolished in 1958. It is apprehended that *madara* will disappear even in Wajimasaki in the future, though it is sung on many occasions now.